



お江戸舟遊び瓦版 1143号

水彩都市江東 ころろ美しい日本の再生 安全・安心まちづくり

お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会 江東区千田 13-10

佐藤千矢子「日本一の『オッサン村』」講談社 22. 4. 20

はじめに——女性政治記者が経験した「壁」

- ・ 私が新聞記者になったのは、男女雇用機会均等法施行の翌年 1987 年に毎日新聞に入社した。長野支局勤務後、政治部に配属された。
- ・ 1992 年竹下派を担当した当時、金丸副総裁の佐川急便 5 億円闇献金で竹下派が分裂した。翌年、選挙制度改革を巡る対立で自民党が分裂し、「55 年体制」が終焉した。
- ・ 2017 年、全国紙で初めての女性政治部長になった。新聞記者は基本的には一匹狼だ。「オッサン」とは、男性優位に設計された社会で、男性が下駄をはかせてもらえる社会を変えたくないということではないか。

第 1 章 立ちはだかるオッサン

- ・ 大手新聞社の新人は、数週間の研修後地方に配属され、取材の基本を叩き込まれる。初任地は長野支局で、女性第 1 号だった。仕事は、「夜討ち朝駆け」を避けて通れない。最初の 1 年間、平日は毎朝続けた。支局勤務の後、政治部に配属された。1 年目は、首相官邸で「総理番」として、首相に張り付く仕事から始まった。この年、女性記者が一挙に増えた。
- ・ 竹下内閣がリクルート事件で短命に終わり、宇野内閣を経て、海部首相になり、総理同行に。政治部の夜討ち朝駆けは過酷で、体力的にギリギリのところを持ちこたえていた。政治家が出勤する際の車に記者と一緒に乗り込み、車中で話を聞く取材方法を「ハコ乗り」と言い、毎朝の記者の競争だ。慣れた記者は乗れた記者から情報を得られるが、女性にはなかなかだった。
- ・ CM ソング「24 時間働けますか」の時代、誰に言われるまでもなく、女を捨てて働くことを自らに課すようになっていた。私の取材先の政界、官界にはオッサンが多い。「夫は外で働き、妻が家庭を守るべき」という性別役割分担意識が染みついている人が多かった。
- ・ 1990 年、新人記者の自分は、付度なく質問を連発した。他の男性記者は当時の実力者梶山氏にはにらまれられないように厳しい質問をするのを上手に避けながら対処していたが、梶山氏には目を付けられる存在になってしまった。自民党の派閥政治が機能していた時代、花形の経世会担当の女性第 1 号になった。梶山国対委員長に張り付いたりした。
- ・ 金丸副総裁佐川急便 5 億円闇献金事件は、朝日新聞が疑惑を報じ、その後怒涛の日々が続いた。金丸氏は自民党本部で、5 億円受領を認める記者会見をし、自民党下野・55 年体制崩壊となった。竹下派は事件処置の仕方を巡って対立し、小沢一郎氏らが離党するに至った。
- ・ 記者同士で「はめる」「外す」は相手が女性記者でなくてもおきる。女性が出てくると叩くという男性は、①ミソジニー（女性嫌悪、女性軽視）と、②足を引っ張りやすい女性を外そうとするタイプで、女には政治は判らないとなる等。
- ・ 1992 年から始まった政争の内実は、リクルート事件からの政治改革論議が、選挙制度改革を巡る対立になり、自民党最大派閥の竹下派が小沢対反小沢に分裂し、自民党が割れ、細川政権が誕生し、55 年体制が崩壊した。

第 2 章 ハラスメントの現場

- ・ セクハラは決して昔ばなしではない。損保会社と代理店との 10 人程度の宴席で、胸を触られそうになって、「やめてください」というと、同席の男性社員たちは驚いていたという。



- ・ 私の場合は、ジェンダー・ハラスメントも結構つらかった。これだけ認識が広まってきたように見えるのに、それでもなくなるのはなぜだろうか。オッサンたちはこのままでは自分の娘が同じような被害に遭うかもしれないと思わないのだろうか。

第3章 「女性初」が嫌だった

- ・ 私の場合も女性初の自民党経世会担当、女性初の毎日新聞ワシントン特派員、そして女性初の全国紙政治部長など「女性初」がたくさんあった。
- ・ 2021年10月には、オッサン社会の象徴のような労働界で「女性初」が誕生した。日本労働組合総連合会会長に芳野友子さんが選ばれ、1989年の連合発足以来初めての女性が会長になった。連合に詳しい元野党議員は「困った時には、女性か若い人にやらせるのがいいんだよ。」政治的な路線対立から人事が迷走しなければ、連合の会長に女性が選ばれることはなかったかもしれない。
- ・ 「女性初」が気にならなくなり、積極的に受け入れて行こうと思えるようになったのは、2013年に論説委員になった頃だった。48歳の頃で、四半世紀も悩まされていたことになる。論説委員は新聞社の社論を担い、2時間近い議論を重ねながら、1日2本の社説を執筆している。新聞記者は一定の年齢になると、ライターとして生きていくか、会社の幹部になるか選択を迫られる。
- ・ 政治部長になった時は、毎日新聞社で5人の女性部長が誕生した。『週刊女性』が早速記事にした。今回の女性登用は、毎日新聞のドン朝比奈豊会長が旗振り役と続く記事だった。デジタル時代になり、各紙とも部数が落ち込み、改革を迫られ女性活用になった。
- ・ 2001年ワシントン特派員に出る時、米国から世界を見る報道が求められ、一番仕事をしたという理由で推薦されたと聞いた。赴任の前月に世界を揺るがす米同時多発テロが起き、その後アフガニスタン戦争、米中間選挙、イラク戦争等を取材し、私の財産になった。
- ・ その後、川崎支局長に移動し、幅広い視野を身に着けることができた。私たちの世代は、上司から「できないと言うな」「弱音を吐くな」と育てられた。私には逃げるという選択肢はなかった。
- ・ 政治部長に就任後、政治家への挨拶回りを行ったが、新聞社は強固な男性優位社会だ。人脈がものを言う永田町、霞が関で、挨拶は非常に重要で「挨拶に来なかった」と言われぬように。
- ・ 政治部長として仕事は、「オッサンの壁」よりも「安倍政権の壁」との闘いだった。政治部長は、小さな勉強会から大講演会まで、頻繁に話をすることを求められる。北海道から九州まで。2017年Yahoo ニュース特集「女性政治部長3氏（毎日新聞、日本テレビ、フジテレビ）の座談会」が開かれ、多くの反響が寄せられた。
- ・ 政治部長の2年間は、森友学園問題に始まって、都議選、衆議院選、自民党総裁選、平成から令和への改元などがあり、安倍長期政権の終盤で、政治の信頼が大きく損なわれた時代だった。

第4章 女性議員の壁

- ・ 2021年4年ぶりに衆院選があり、女性議員が減少した。秋の自民党総裁選に男女2人ずつが名乗りを上げた。高市氏は8月10日発売の『文藝春秋』で出馬すると寄稿していた。ちなみに、スイスのシンクタンクは、日本のジェンダーギャップ指数は156ヶ国中120位で、G7では最下位だ。衆議院選同期の野田聖子氏と高市氏が総裁選に出馬し、野田氏は多様性という視点を武器に闘い、高市氏は自民党の中でもかなり保守派の政治家で、防衛費大幅増額とアベノミクスを主張した。選択的夫婦別姓に賛成したのは河野氏と野田氏で、岸田氏と高市氏は反対した。
- ・ 私は、選択的夫婦別姓は、女性の生きづらさを解決の一丁目一番地と感じている。

第5章 壁を壊すには

- ・ オッサンは自分たちが履いてきた下駄を見つめ直し、女性をはじめ社会の弱い立場に置かれた人たちの足元を見て欲しい。これからの若い女性は、必ず時代は変わる。社会は良くなると信じて、力強く歩んで欲しい。「オッサンの壁」は超えるものではない。壊すものだ。

所感：女性初の高市総理が選ばれたが、大型予算、大規模軍事費、台湾有事発言など問題が大きい。日本のジェンダーギャップ等、世界の標準にしなければならないと痛感する。（文責 中瀬）